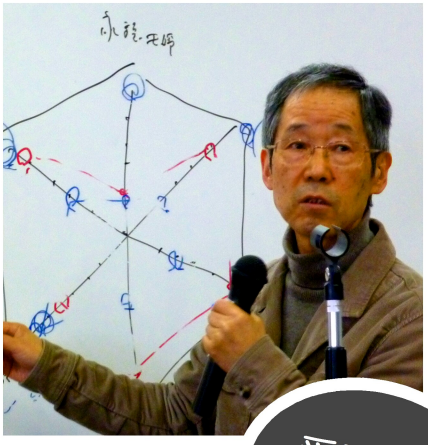
第４回ボランティア・地域づくりコーディネート力講座

講演・シンポジウム「居場所と役割」

11月1日（日）住民流福祉総合研究所代表の木原孝久さんに講演いただきました。ボランティアのつどいと同時開催ということもあり、多くの活動者が参加しました。

「高齢者、障がい者など、要援護者と言われる人ほどボランティアをしたい」という木原さんの話から始まりました。

「人のためになる＝自分の価値を高める」ことは、日頃助けられる側の要援護者だからこそ一番欲していること。だからこそ、その人が自分の価値を高めていく「役割」が求められ、



「趣味学習」「健康」「収入仕事」「社会活動（ボランティア）」「友達」「家庭夫婦」の六角形の図を使いながら

「要援護者でもボランティアができる」という発想が必要になります。自分が持っているものを生かして人の役に立ち、喜んでもらえる。求められている「居場所」とは、そんな場です。

例えば、ひきこもりの人に、家でできるインターネットでの買い物を頼む、人と関わりの少ないおばあさんに油絵の特技があることを知り展示会を提案するなど、その人のこだわりがあるところを入口として、その人なりの「役割」を考えていくという木原さんの話に受講生も刺激を受けていました。

後半はシンポジウム。「みんな役割を求めている。その自発性に私たちは支えられています」

「自閉症と認知症の人って相性がいい。お互いに偏見がない。弱い、優しい…（逆に）そこが強み」と障がい者の活動の場を開いているハッピースポットクラブの高山さや佳さん。「障がいといっても、（健常者と）地続き。障がいにこだわりすぎずに、その人を見ることが大切」とは、ひきこもりの人の居場所を開いているアトリエ虹の池田幸雄さん。ぞうきんを縫うサロンを開いている若槻の地域福祉ワーカー宮澤由枝さんは「やってもやらなくても、話しても話さなくてもいい、無理をしない場」。どの居場所にも共通する大切な話が出てきました。

「まちの縁側育みプロジェクトながの」
小林博明さん他３人のシンポジスト

受講者レポート

今後「見守りや支え合い」を考えなければならない中、今回初めて木原先生のお話を聞かせて頂きました。

それぞれの環境の方に「居場所と役割」があり、障がいになる事を探すのではなく「才能」を探す―自閉症の方の、天井のしみ一つが気になってしまうこだわりを、印刷会社でミスプリを探すお仕事に結びつけ生かす事で、その方の変えられない障がいを能力に替え、その人なりの役割ができたという事例は、私の中で印象的でした。

さまざまな状態の方を目を背け排除するのではなく「受け入れる社会」を作っていく事は、今後更に助け合いが必要とされる中、とても大切な事だと思いました。

私には病院にいる母がいます。一年前大手術の後、元気に戻って来る予定でした。けれど、手術中に想定外の事が起こり、それまで話をしていた母は、今はベッドの上で話す事も、食べる事もお休みしたままです。けれど、そこにいてくれるだけで、私たち家族を笑顔にしてくれ、生きる力をくれています。それが母の「役割」なのだと感じました。

そして、さまざまな事情があって家から出られなくなってしまった大切な友人にも、「居場所」があり、その人なりの「役割」がある事も教えてもらいました。

自分が生まれ育った地域のワーカーにご縁を頂き半年。これからもおごらず「素人の考えや感覚、心」を大切にした福祉のプロになれるように顔晴り（がんばり）たいと想います。

朝陽地区社会福祉協議会
地域福祉ワーカー　原山嘉子